東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退

秋　永　一　枝

キーワード：東京弁アクセント，芦安弁アクセント，接合型アクセント，アクセントの単純化

1

古代日本語は単純語・派生語が主流であったが，おいおい複合語が大半を占めるようになった。中でも複合度の高い癒合語[1]・結合語がその大部分で，一まとまりのアクセント（以下アと略す）で発音されるものが安定型となっていた。複合語において一まとまりの安定型アというと，前後部の結合部分，即ち前部成素の末拍か後部成素に核のある中高型，もしくは平板型である。敬遠されることの多い接合語は，前部成素のアを生かす，或いは前部成素アによって全体のアが決定されることが多く，そのような頭高型や前部成素中高型は急速にその数を減じつつある。これは東京弁ア[2]のみならず，東京式アの多くの地域でみられる現象で，地域により，またグループにより遅速の相違はあるが，ともに単純化へと進行しつつある。

東京式アの地域で二十世紀最大の変化は，複合語アの接合型が，結合型へと移行していくことであろう。よく言われる外来語の平板化現象は個別的な類推変化で，東京式アに限るものではない。ここでは接合語の変化の動向を，東京弁・芦安弁などから検証してゆきたい。

なおここで述べる東京弁話者とは，東京旧市内で敗戦までに言語形成期を終った方で，両親または保育者も江戸墨引内か東京旧市内で生育の方を原則としている[3]。筆者は昭和28～30年（A），42年頃（B），52，53年（C），平成1～5年（D）の東京語ア調査で，それぞれの時代の変化の動向を報告してきた[4]。A～Cの高年層話者の殆どは明治生まれで，職域も広く，古い伝統型アが目立っていた。今回表出したのはD調査によるもので，話者の両親のすべてが東京弁の規定に合致するものではない[5]。以下表中，話者の欄で地名の「本小」は本郷区から小石川区，「下本」は下谷区から本所区の略。地名の次の数字は1900年生の下二桁を示す。左10名が男性，右10名が女性。辞書欄の略称は注参照[6]。

芦安弁アとは，山梨県中巨摩郡芦安村各集落の高年層アをいう。1994年8月，1995年2月に行なった院生との共同調査[7]に加え，本年10月初に筆者が行なった調査のうち，東京弁アと関連の深い接合語アについてのみ報告する。接合語アに関しては共同調査のア項目ではあまりに少なく，10月調査では項目を追加し，方言形アを確かめつつ行なった。生

えぬきでない者が実施するア調査が読み上げ方式のみでは実態がつかめないことは今更言うまでもないが，ア変化の途上にある語の場合はことにその感が深い。以下，甲府より遠い順に集落名と略称を記す。略称の次の数字は東京語の表に同じ。

桃（桃の木平），沓（沓沢），大久（大曽利久保），大西（大曽利西），大東（大曽利東），小（小曽利），古（古屋敷），新（新倉）…以上芦倉地区。この他大曽利・小曽利の間に 西（西河原）があるが今回の調査には含んでいない。安（安通地区）…新倉集落の対岸。

以上のうち，沓沢と大曽利集落は，音韻・アクセントともに古形を保つ傾向が高い。詳細は別途報告書にゆずり，ここでは接合アクセントの問題点を指摘するにとどめておく。

2

接合語アの変化の遅速は，複合の成りたちによって異なる。例えば「対照・対立・並立する語の連なった名詞」などは，もっとも前部成素のアを生かす傾向があった。だが近年それらを結合型に発音する話者が増えていることは，既に述べた通りである[8]。

例，互い違い（2）→（4），　すったもんだ（3）→（4）

接合動詞における変化も同様であるが，東京アで既に結合して平板型を示す前部起伏式動詞が，芦安高年層アではまだ接合型を残す話者もいる。そこで，両アの関連を示すため東京高年層話者20名の計と，辞書類アの新古の計を記しておいた。［表Ⅰ］a「互いちがいに」の項で2（10）1（1）／4（10）とあるのは，／の前が古いア，後が新しいアで，高年層20名のうち（2）が10名，（1）が1名，（4）が10名であることを示す。一人で二様のアを答えた場合も$\frac{1}{2}$とせずに合計した。［表Ⅰ］bの辞書類で「金1943」が9／3とあるのは，古アが10語のうち9語，新アが3語注記されていることを示す。既に述べたことだが[9]，［表Ⅰ］aで177／38の数が示すように，高年層20名の変化型が伝統型の21.47％であるのに，［表Ⅰ］bの『新明解四』が11／9で82％，『大辞林』が12／6で50％である。これは前者が旧市内の高年層から，後の二者が新市内を含めた高年層・中年層・青年層のアから抽出した結果である。

次に前部成素起伏型動詞の大部分が平板式アに変化した中で，強めの意をもつものが前部動詞のアを生かす接合型アとなっているものを選び［表Ⅱ］に示した。しかし現在これらも複合度の強い結合型に変化しつつある。

かつて私は，『日本大辞書』の末尾にある「附録＝日本音調論」の記述と『大辞書』中の例から次のようにまとめておいた[10]。

前部動詞が起伏式で三拍以上のものは，前部動詞のアを生かして起伏式となる。（ただし，これは例も少なく，その上全体が（イ）の型（＝後部成素まで高い中高型）のようになる例も多い）

●○○○○　（参り行く，帰り去る）
○●○○○　（迷ひ聞く，思ひ切る，砕け去る，作り立つ，痛み入る，恐れ入る）
○●○○○○　（思ひ当たる，思ひ残す，作り立てる）

そしてそのうち，強調の意を含む11語を調査し，平板型13.4％，接合型75％，結合型11.6％の結果を得ている。『大辞書』中の「参り行く，帰り去る」の（1），「迷ひ聞く，作り立つ，作り立てる」の（2）は，当時の予備調査でも全く現れなかったのである。だが，強調の意を含まぬものでも前部成素に核のある接合動詞が存在する地方も多く報告されており[11]，美妙以前の東京アでは前部3拍のみならず2拍にも多くの接合型が存在していたと想像される。

［表Ⅱ］aの場合は個人差が大きいが，語別の集計では，「思い切って，こきつかう，思い切る，かじりつく，叩きつける」などに接合型がめだつ。［表Ⅱ］bの辞書別では，『日本大辞書』，『新辞海』の新型0に対し，『大辞林』80％，『新明解四』の66.67％が目立つものである。但し，『大辞林』の接合型は「こきつかう」1例のみであり，これは「こく」という動詞本来の意識がなくなり現代若年層も頭高型で安定しているところから省くと，この類の接合型が殆どなくなってしまう。ところが，「思い……」のグループで「思い切る，かじりつく」のような2型は認めず，「思い惑う，思い乱れる，思い煩う」の2型を認めるのはどういうことだろうか。単に拍数の問題としても理解に苦しむ。

さて東京アでは，強めの意をもたぬ前部起伏式動詞「書きあげる，読み直す，降り出した」などは早く平板型になったが，複合の弱い時期は芦安ア［表Ⅶ］にみられるように，前部成素卓立型がもっと多かったに違いない。芦安高年層では殆んどの地区で「降り出した」に（1），「動き出した」に（2）が多くみられるほか，沓沢と大曽利の集落には「書き直す」などに（1）がみられる。この大曽利東40fの話者は，こちらの「できるだけ芦安のことばで」というお願いに生き生きとした芦安弁で答えて下さった貴重なインフォーマントである。また小曽利27fの話者は，書キアゲルは（0）だが 掻キ出ス，掻キアゲル，アリスギテを（1）に，沓沢23f，大曽利久保32fは，降リダシテ（キトーワ）を（1）に発音するなど，方言談話であればもっと多くの前部卓立型が現れるものと思う。なお桃の木平16mは旅館業ということから，ふだんでもあまり方言形を使われないそうで，年齢のわりに早く結合型に変化している。［表Ⅶ］の古28／新28／中78という数は個人差を無視しているようだが，平板型が古型や新型の倍以上である。テレビの攻勢や他地域との交流（兵役を含めた他地域勤務など）が少なければ，かつての東京アのようにもう少し平板型が続いた後に新型が現れるという経過をたどったであろう。100年以上かかった東京アの変化を，芦安アは短期間に進行させたもののようだ。

［表Ⅱ］aに示すように，東京高年層でももはや結合型がめだつが，［表Ⅷ］の芦安高年層ではまだ接合型の力が強い。［表Ⅷ］の初めの8語までは東京高年層アでも頭高型がみられず平板型で発音され，若年層になると中高型となる語である。だが芦安アでは 取リダス，切リキザム，スリコンダ，降リコンダなど頭高型が多い。取リダスに（1）が残るのは，方言形 取ンダシテ（1）があるからだろう。反対に「いきりたつ」が全員（4）なのは，方言形にこの語がないからである。桃の木平16m，沓沢23f，大曽利久保32fのネークリ返ル（3）は「煮えくり返る」に表示したが，ニエクリ返ルと教科書風によめば結合型の（5）が現れる人もいる。沓沢23fはこの他，食イツク，取ンダシテ，ケットバ

イテ，ケッツマズクを（1）に，大曽利東40fは 切リコム，コビッツクを（1）に，沓沢27mは コビッツクを（1）に発音する。また大曽利東40fは芦安ことばとして カブリッツク，オメーキル，オメーキッテ，オメーダス，オメーアタル，タタキッツケルを（2）で発音され，これは別記せず＊を付して共通語形の表に入れたが，「思いたったが」の オモイタットー（4），「おびきよせる」の ドビキヨセル（2）は表に含めなかった。集計の古の（4）は「ひっぱり出す，煮えくり返る，のたうち回る」の場合，また「かじりつく」の（3）は同じ話者に（2）があるため加算しなかった。芦安中年層ではこれら前部卓立型はまだ少しは残るが，若年層に及ぶと殆ど消えて結合型，それも一足とびに中高型になってしまう。

［表Ⅶ］［表Ⅷ］などのグループは談話と読み上げ調査で大きく異なるが，これらは芦安高年層の談話資料を文字化した際に別途報告する。但しこのような分離は何も芦安ことばに限ったものではない。群馬県調査のうち，中年層の一例を報告しておく。

群馬県吾妻郡吾妻町大字原町生育の39fの話者は，友人たちと雑談の折は，（草を）ホックリ返ス（1）のように，前部卓立型で発音することが多い。そこで表ⅦⅧの類を読み上げてもらうと以下のようである。［表Ⅶ］のうち「動き出した」が（4）であとは（0），［表Ⅷ］では前部卓立型（カジリツク（3）の類も含む）は「こき使う，かじりつく，かぶりつく，思い切る，思い切って，叩きつける，ひっぱり出す」の7語で，あとは平板型9，結合中高型7であった。そこで，ふだん話すように前後に何かつけてしゃべってくれないかと頼むと以下のようになった。

（窓の外を雪が）降リダシタネ（1）

（物を）切リキザンデ（あそこへ捨ててやろう）（1）

（ああ）オモイダシタ（瞬間的にいった時ね）（2）

（前につづくと）イキリタツ（というね）（2）

この他，前部平板型動詞の場合も，（間にあわなくて）乗リコンダ（1），乗リコンデキタ（1），（車を）乗リ回シヤカッテ（1）のように頭高型が現れる。だがこの地域の若年層ではこの前部卓立型は著しく減少しているようだ。

同様の変化は，馬瀬良雄編『広島市方言アクセント辞典』によってもうかがえる。ここで高・中年層話者6名（07，13，26，29，43，47年生）に現れる以下のような前部卓立型は，若年層（70，71，72年生）では殆ど全部結合中高型に変化している[12]。

1型（漢数字は6名中の（1）発音者数）……書きこむ（二），掻き出す（四），書きとる（二），駆けよる（二），勝ちとる（三），勝ちぬく（二），勝ち進む（三），切りきざむ（三），すりこむ（四），すりむく（二），すりへらす（三），すりへる（三），立ち上がる（二），取り出す（四），はみ出す（四），降り出す（五），読みとる（一）

前部卓立型（（1）以外）……おびき出す（四），思い出す（四），思い切って（五），かじりつく（四），かぶりつく（四），こびりつく（四）

その広島市高・中年層でも「立ちどまる，食べすぎる，取りつける，取りやめる，読み合わせる」など5拍以上の非強調型が6名とも結合中高型のみであるのは，東京より早い

変化といえる。東京高年層ではまだ平板型・中高型の両様であるから。

3

［表Ⅲ］は3拍の後部成素が和語の，［表Ⅳ］は字音語の結合名詞だが，古く頭高型に発音されたものをまとめておいた。（但し，「しゃりっこつ」は「しゃれこうべ」との関連でⅢに含めた。(1*) としたのは シャリコツ (1) で発音したもの。）以上は馴染み度との関連が深く，東京高年層でも「赤とんぼ」が20名中8名，「肩車・陣羽織」が20名中6名が頭高型に発音するのみで，語の衰微とともに伝統型は大きく衰退した。

［表Ⅸ］の芦安アで「ひいじいさん，ひいばあさん」の頭高型が多いのは，まだこの語が健在なのであろう。「影法師」に頭高型はでないが，沓沢23fが カゲボッチ，カゲンボッチと，沓沢54fが（としよりは）カゲンボシというとしてともに頭高型で発音する。東京にも古く カゲッポシ (1) があり，秋永の調査ＡＢではこのグループは頭高型が主流であった。［表Ⅳ］ａのうち，「影法師」の日本橋10f，四谷21fは第１，２拍とも高く発音した。表中 (2*) とし，一応「中」に含めておいた。「一寸法師」は「…ぼうし」「…ぼし」をあわせ1回と数えた。(3，5) とした3名は，ともに1回めに (5)，2回めに (3) で発音したもの。なお芦安で「赤とんぼ」は オショーリョートンボであり，馴染みの薄いところから頭高型1名となったもので，「食いしんぼう」の中高型もその部類かもしれない。

4

［表Ⅴ］は「寺社名・山名など固有名詞をつくるもの」，「人名や一般名詞について意味をそえる様・さん・氏など」のうち，アのゆれているものを掲げておいた。これらは前部成素の固有名詞類のアを保とうとするもので，ともに馴染み度と関係すること，既に記したことである[13]。尚付け加えれば，「回向院，伝法院」の頭高型は馴染み度の高い土地での，「回向院 (2)，伝法院 (3)」の中高型は馴染み度の低い土地でのアである。「おんばさん」も「おんば」(1) という語を知らなければ一般的複合の (3) となるだろう。「御嶽山（おんたけさん）」の場合，オンタケの (1) を生かした頭高型の他に (3) がめだつのは，歌の節からもきていると思われる。［表Ⅹ］の「身延山」の (2) も，「身延」(2) のアを生かしたもので，東京にも別院があって馴染み度の高い東京弁話者は「身延山」(2) と発音し，馴染みのない話者は (3) で発音している。本郷の「右京山」の (1) も同様だろう[14]。

［表Ⅵ］［表Ⅹ］の一部は助詞「が」で連なるもので，東京の頭高型は近年すっかり衰退した。調査時に「種子島」での実験報道が続き，鉄砲の意の馴染み度が激減したことも原因の一つであった。芦安アの「八ヶ岳，駒ヶ岳」の頭高型が16名ずつでまだ接合型が優勢であるのは，ふだん ヤツ，コマのように，ともに (1) で発音するからであろう。「茅ヶ岳[15]」を含め，山梨県でこれらの山々と近い地域では頭高型に発音されることが多い。

5

以上，接合語のグループによってア変化に遅速のあることを述べてきた。だが，どちらも少数派の不安定型から多数派の安定型に変移する点では同じである。更に，それぞれの接合型アの支えがなければ今まで生きのびることはできなかった。

東京アで「肩車，鎌いたち，鬼ばばあ，海坊主，影法師，陣太鼓，小うるさい，生易しい」などを（1）で発音する話者は，「恋いしたう，冀う」も（1）で発音した。現在若年層にまで（1）が残るのは，「手足，田畑，雨風，前うしろ，立つ瀬」などの対語や接合名詞，「精出す，損する，苦労する，マークする，良くなる」のような接合動詞であろう。もはや「鍋釜，読み書き，出し入れ」（1）や，「鞭打つ，馬鹿にする，持ってくる」（1），「夢みる」（2）なども結合中高型が増加している[16]。

芦安高年層はほぼ全員が，カプミ(ビ)ッチョ（とかげ），ガンボージ（たんぽぽ），カット(コ)マンジュー（肩車），ウッチンド（死んだ），オ(ウ)ブチャール（すてる）を（1）で発音するが，そうした（1）の存在が，取リダス，降リダシタ，スリコンダ，ブッツケタなどの（1）の存続を支えるものだろう。東京・芦安ともに，（1）に限らず前部卓立型複合語でも同様である。

むしろ談話の中に●○…○や○●○…○が交じることで，高さ・速さ・強さが変容し，リズミカルになるのを好んだのであろう。現在の東京共通語は平板型と結合中高型があまりに多くなり，更に“かな”の通りに発音することが好まれたため，東京弁話者からみるとリズム感に乏しく切れ味も悪い。テレビから流れる若者(向け)番組は，高年層にとってメリハリがなく騒がしいばかりに聞える。その感覚の差は東京弁から東京共通語弁，更に首都圏弁に変化してゆく時代の流れを象徴するもののようである。

注(1)　『明解日本語アクセント辞典』巻末1ページ参照。

(2)　「東京弁アクセントから首都圏アクセントへ」(『言語学林』) 参照。

(3)　i「消えゆく東京弁」(「国学院大学日本文化研究所紀要七四」，ii「長谷川時雨の東京弁——辞書にない語を中心に——」(『東京弁は生きていた』203ページ) など。

(4)　i「東京アクセント第一次調査報告——東京都区内生育者における調査報告——」(私家版。昭和32年稿，52年刊)，ii「アクセント推移の要因について」(「国語学」31)，iii「江戸アクセントから東京アクセントへ」(「国語と国文学」44巻4号) など。

(5)　「東京旧市内のアクセント——高年層20名資料一覧——」(「東京語音声の諸相(3)」) など。

(6)　辞書欄略称。
美…日本大辞書（1893）　神…国語発音アクセント辞典（1938）　三…新辞海（1938）　金…明解国語辞典（1943）　**NA**…日本語アクセント辞典（1943）　秋…明解日本語アクセント辞典（1958，二版1981）　平…全国アクセント辞典（1960）　**NB**…日本語発音アクセント辞典（1966）　**NC**…同（1985）　**N**研…大辞林（1988）　柴…新明解国語辞典第四版（1989）

(7)　調査者　1994年8月　白勢彩子・勢登雅子・田中ゆかり・松永修一・三原裕子・吉田健二（早大院生），加藤大鶴（一文学生），坂本清恵と筆者。1995年2月　院生有志と筆者。1995年10月初　筆者。1994年8月調査の語彙項目に関しては，白勢・三原他「山梨県中巨摩郡芦安村方言の

現状――高年層調査中間報告(1)――」(1994年早大国文学会秋季大会口頭発表レジメ)，アクセント・音韻を除く調査項目は，田中ゆかり「言語共同体を構成するもの――山梨県中巨摩郡芦安村若年層の場合――」(「国文学研究」117)に報告がある。なお，芦安村の方言全般に関しては，清水茂夫氏のくわしい調査報告(『芦安村誌』第4章「方言」の項)を参照して頂きたい。

(8) 注(3)ｉ及び注(2)。

(9) 注(2)。

(10) 注(4)のiii。

(11) 金田一春彦「伊豆諸島の音韻とアクセントところどころ」(「方言研究」八。『日本語方言の研究』に収録)，大原孝道「類聚名義抄のアクセントと諸方言アクセントとの対応関係」(『日本語のアクセント』)，都竹通年雄「動詞の連用形とアクセント」(『アクセント論叢』。『都竹通年雄著作集1』に収録)など。

(12) 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵「広島市方言語アクセントの特徴と世代的変動――『広島市方言アクセント辞典』の資料をもとに――」(「日本方言研究会第61回発表原稿集」。1995．10．20)で若年層の変化に言及がある。

(13) 「音韻・アクセントに現れた地域差」(「言葉の馴染み度と発音――地域差を中心に――」の4。「東京語音声の諸相(3)」)など。

(14) 金田一春彦氏の御教示によること，注(13)で記した。

(15) 「茅ヶ岳」は桃の木平16ｍ，沓沢54fで(1)，「古屋敷」は小曽利22ｍで(1)，古屋敷16ｍで(1，3)，「高雄山」は小曽利24fで(2)。

(16) 『明解日本語アクセント辞典』の巻末法則18，19，45～49などを参照されたい。

新刊紹介

木村義之著

『斉東俗談の研究―影印・索引―』

『斉東俗談(さいとうぞくだん)』は近世俗語辞書の一種で、書名自体はいくつかの研究書で目にすることがあるものの、まとまった形での研究は従来まったくなされていない。今回刊行された本書は、その『斉東俗談』の基礎的研究として位置付けられるものである。本書の研究編では、まず『斉東俗談』の書誌や研究史にふれ、著者や成立年、執筆目的について考察する。そしてその編集方針、本文の検討、資料的性格などにも言及して、『斉東俗談』が語彙や表記、漢字の用法、術語等の観点から、近世国語史の資料として重要な役割を果たすであろう可能性を示唆している。索引編は、見出し語、人名、書名、語句から影印編の検索ができるようにしてあり、異体字対照表も収録されていて、これから本書を利用しようとする研究者が使いやすいようにこまやかな配慮がなされている。

本書は『斉東俗談』をめぐる研究にとどまらず、近世国語史の研究をしていく上でも利用価値の高い一冊であるといえよう。　(1995・10　おうふう　A5判　406頁　18,000円)

〔寺田智美〕

［表Ⅰ］a

調査語彙	計
互いちがいに	2(10).1(1)/4(10)
右左に	2(8).0(13)/3(2)
明け暮れ	2(18)/0(3)
忠孝の(二字)	1(20)
駆け引きを	2(11)/4(1).0(8)
日時を	1(15).2(6)/0(1)
生き死には	1(7).2(13)
すったもんだで	3(18)/6(1).4(3)
高ひくが	1(20)/2(1).4(1)
骨身を	1(5).2(12)/0(4).3(3)
古/新	177/38

［表Ⅱ］a

調査語彙	計
好きこのんで	2(7)/4(13)/3(1)
思い切る	2(17)/4(8)/0(3)
思い切って	2(20)/4(2)
痛み入る	2(10).3(2)/4(9)/0(3)
痛み入ります	2(14).6(7)
かじりつく	2(13).3(1)/4(13)/0(1)
かぶりつく	2(10).3(1)/4(13)/0(1)
痛めつける	2(6).3(1)/5(18)
叩きつける	2(15)/5(11)
こきつかう	1(19)/4(2)
思いあたること	2(7)/5(3)/0(11)
いきりたつ	2(5)/4(16)
おびきよせる	2(2).3(2)/5(10).0(8)
かじりつく(子ども)	2(16).3(1)/4(6)/0(1)
煮えくり返る	3(9).4(1)/5(15)
のたうち回る	3(6).4(1)/6(9).5(2)/0(6)
思いたったが	2(9)/4(11)

［表Ⅰ］b

	美1893	神1938	三1943	NA1943	金1943	秋1958	平1960	NB1966	NC1985	柴1989	N研1988
古/新	5/2	10/2	6/0	9/2	9/3	15/3	11/4	13/4	13/4	11/9	12/5

［表Ⅱ］b

	美1893	神1938	三1943	NA1943	金1943	秋1958	平1960	NB1966	NC1985	柴1989	N研1988
古/新/中	5/0/1	7/1/1	4/0/2	7/3/8	7/3/6	15/14/11	7/16/8	15/16/12	14/11/10	7/16/1	1/16/3

［表Ⅲ］a

調査語彙	神田04	深川06	個島07	神田12	浅草17	芝17	本所19	深川20	青山23	四谷23	本小03	浅草08	本所10	日本橋16	日本橋16	下本19	個島19	芝21	四谷21	本郷22	計
高島田	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3(20)
陣羽織を	3	1	3	3	1	3	1	1	3	3	3	1	3	1	3	3	3	3	3	3	1(6).3(14)
しゃりこうべ	3	3	N	3	3	3	3	1	3	3	3	N	3	3	3	3	3	3	3	3	1(1).3(17)
しゃれこうべ	3	3	3	3	3	3	3	3	3	N	3	3	3	3	3	3	3	3	N	N3	3(18)
しゃりっこつ	N	(1*)	2	N	N	N	(1*)	N2	N	(1*)	N	N	N	N2	N	N	N	N2	N	N	1(3).2(4)
赤とんぼが	3	1	1	3	3	3	1	3	1	3	1	3	3	1	3	3	1	3.1	3	3	1(8).3(13)
鬼瓦	3	3	1	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1(1).3(19)
屑車を	3	1	1	3	3	3	1	1	3	3	1	3	3	1	3	3	3	3	3	3	1(6).3(14)
古1/新3.2	0/7	4/4	3/4	0/7	1/6	0/7	4/4	3/5	1/6	1/6	2/5	1/5	0/7	3/5	0/7	0/7	1/6	1/8	0/6	0/7	25/119

［表Ⅲ］b

調査語彙	美1893	神1938	三1943	NA1943	金1943	秋1958	平1960	NB1966	NC1985	柴1989	N研1988
高島田	/	1.3	/	1.3	3	3古1	3	3	3	3	3
陣羽織を	3	1	1	3.1	1.3	3古1	/	3.1	3.1	3.1	3
しゃりこうべ	3	3	/	3	/	3古1	/	3	3	/	3
しゃれこうべ	3	/	3	3	/	ｼｬ.ｻ3古1	/	ｻ(ｼｬ)3	3		ｼｬ.ｻ3
しゃりっこつ	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
赤とんぼが	0	1	/	1	1.3	3古1	3.1	3	3(伝1)	3	3
鬼瓦	1	3	3	3	1.3	3古1	3.1	3	3	3	3
屑車を	1	1	1	1	1.3	3古1	3	3	3	3	3

［表Ⅳ］a

調査語彙	神田04	深川06	佃島07	神田12	浅草17	芝17	本所19	深川20	青山23	四谷23	本小03	浅草08	本所10	日本橋10	日本橋16	下本19	佃島19	芝21	四谷21	本郷22	計
陣太鼓	3	1	3	3	3	3	1	1	1	3	3	1	3	1	3	3	3	3	3	3	1(6).3(14)
海坊主が	1.3	3	1	3	1	3	1	1	3	1	1	3	3	1	3	3	1	1	3	3	1(10).3(11)
一寸ぼうし	3	3	3	3		5	5	3	5	3.5	3	3	3	5	3	3.5	3	3	3.5	3	3(15).5(7)
一寸ぼし		3			3												3				3(3)
影法師	3	2.1	1	3	3	3	1*(ｷﾞｼ)	1	1	1	2	1	3	2*.3	1	3	1	1	2*	3	1(10).3(8).2(4)
古/新/中	2/3	3/1/1	3/1	1/3	2/2	0/4	3/1	4/0	2/2	3/2	2/1/1	3/1	1/3	2/2/1	2/2	1/4	3/1	3/1	1/3/1	1/3	42/40/4

［表Ⅳ］b

調査語彙	芙1893	神1938	三1943	NA1943	金1943	秋1958	平1960	NB1966	NC1985	柴1989	N研1988
陣太鼓	3	1	/	1	3.1	3古1	/	3.1	3(伝1)	3	3
海坊主が	1	1	/	1	/*	3古1	/	3.1	3伝1	3.1	3.1
一寸法師（ぼうし）	/	3	3	3	3.5	3.5	5.3	5.3	5.3	5.3	/
一寸法師（ぼし）	3	3	/	3	/	/	/	/	/	/	/
影法師	1	1	1	1	1	1新3	1.3	3.1	3.1	3.1	3.1

［表Ⅴ］a

調査語彙	神田04	深川06	佃島07	神田12	浅草17	芝17	本所19	深川20	青山23	四谷23	本小03	浅草08	本所10	日本橋10	日本橋16	下本19	佃島19	芝21	四谷21	本郷22	計
御厳山	1	1	1.3.4	4	1	4	1	1.3	3	3.1	1	1	1	3.4	3.4	4	1.3	1	1	1	1(14).4(6).3(7)
おんばさん	1	1	1	N	1	1	1	N	1	N3	N	1	1	1	1	1	1	1	1	N	1(15).3(1)
回向院	1*	1	2	1	1	2	1	N2	2	2	2	1	1	1	2.1	1	1	2	2	2	1(11).2(10)
回向院	2*	1	2	1	2*	2	1	N	2	2	2	1	1.2	1	2	1	1	2	2	2	1(8).2(12).N(1)
長命寺は	3	1	1	1	1	1	0	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1(17).3(2).0(1)
伝法院	3.1*-	3*-	3*-	1.3*-	1*'	3*-	1*-	3*-	1*-	3*-	3*-	1*-	1*-	3*'-	3*'-	1*-	3*-	3*-	3*-	3*-	1(8).3(14)
古1/新2.3.4.0	4/3	4/1	3/3	3/2	5/1	2/3	4/1	2/3	3/2	2/4	1/3	5/0	5/1	3/2	3/3	4/1	4/2	3/2	3/2	2/2	65/41

［表Ⅴ］b

調査語彙	芙1893	神1938	三1943	NA1943	金1943	秋1958	平1960	NB1966	NC1985	柴1989	N研1988
御厳山	/	(ｵﾝﾀｹ1)	/	/	/	1.3(ｵﾝﾀｹ1)*	(ｵﾝﾀｹ1)	/	(付4.1)	/	/
おんばさん	(ｵﾝﾊﾞ1)	/	1	/	(ｵﾝﾊﾞ1)	1	/	/	/	(ｵﾝﾊﾞ1)	(ｵﾝﾊﾞ1)
回向院	/	1	/	1	/	1新2	/	2.1	/	/	/
長命寺は	/	/	/	/	/	1(2版)	/	/	/	/	/
伝法院（ボー）	/	/	/	3	/	/	/	/	/	/	/

［表Ⅵ］a

調査語彙	神田04	深川06	佃島07	神田12	浅草17	芝17	本所19	深川20	青山23	四谷23	本小03	浅草08	本所10	日本橋10	日本橋16	下谷19	佃島19	芝21	四谷21	本郷22	計
鬼が島に	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3(20)
種子島（てっぽう）	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3(20)
女護が島（ニョ）	3	3	3	1	N	1	1.3	N	1	3	1	3	3	3	3	3	3	1	1	3	1(7).3(12)
古1/新3	0/3	0/3	0/3	1/2	0/2	1/2	1/3	0/2	1/2	0/3	1/2	0/3	0/3	0/3	0/3	0/3	0/3	1/2	1/2	0/3	6/52

［表Ⅵ］b

調査語彙	美1893	神1938	三1943	NA1943	金1943	秋1958	平1960	NB1966	NC1985	榮1989	NG研1988
鬼が島に	1	2.3	/	/	/	3古1	3	3	3	3	3
種子島（てっぽう）	1	(3地)	3鉄砲.地	3鉄砲.地	3	3古1	3	3鉄砲.地	3	3	3
女護が島（ニョ）	/3	/1	/1.3	/3	1.3	が./3古1	3.1	3(/3)	3(/3)	3.1	が./3
女護が島（ニョー）	/4	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

［表Ⅶ］

	桃16m	雲06m	雲23f	雲27m	大久19m	大久32f	大西20f	大東40f	小22m	小24f	小25f	小26m	小27f	古12m	古16m	古21f	古27f	新18m	新20f	新27m	去08m	計	雲54f	古55f
書きあげる	4	0	0	0	0	0	0	0.1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1(1).0(18).4(3)	4(1)	4
書き直す	4	0	4	0.1	0	4	0	0.1	0	4	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	1(2).0(16).4(5)	4	4
読み上げる	4	0	0	0	0	4.0	0	0.1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1(1).0(18).4(4)	4	4
読み直す	4	0	0	0	0	4	4	4.1	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1).0(15).4(6)	4(1)	4
降り出した	1	0	0.1	1	3	3.1	0	1	0	0	0	3	1	0	1	0	3	0	1	1	0	1(9).0(10).3(4)	3(1)	0
動き出した	4	2	2	2		4	2	2.4	2	4	2	2	2	2	2	2	4	4	2	2	0	2(14).0(1).4(6)	4(2)	4
古1.2/新3.4/中0	1/5/0	1/0/5	2/1/4	3/0/4	0/1/4	1/5/2	1/1/4	6/2/3	1/0/5	0/5/1	1/0/5	1/1/4	2/1/3	1/1/4	2/0/4	1/0/5	0/2/4	0/1/5	2/0/4	2/2/2	0/0/6	28/28/78	0/6/0	0/5/1

[表Ⅷ]

	桃16m	香23f	香27m	大久32f	大西20f	大東40f	古16m	計	香54f	古55f
取り出す	1.3	1	1	0	0	3	1	1(4)/3(2)/0(4)	0.1	0
けとばす			1			1		1(4)/4(1)	1	1.3.0
けっとばす		1.4				1	1		4	N4
切りきざむ	1	1	1	0	0	1	1	1(5)/0(4)	1	4
降りこんだ	1	0	0.1	0	1	1	1	1(5)/0(3)	0	3
すりこんだ	1	1	1	0.1	0.1	1	1	1(7)/0(2)	0.1	0
ぶっつけた	3	1.4	3	1.3		3	1.3	1(3)/3(5).4(1)/0(1)	3.1	
ぶつけた					0					0
こきつかう	1	1	1	1	1	1	1	1(7)	1.4	1
いきりたつ	4	N4	N4	4	N4	N	4.2	2(1)/4(6)	N4	4
かじりつく	2	2.3	2	2.4	2	2	2	2(7).3(1)/4(1)	4	N4
かぶりつく		2	2	2	2	2*	2	2(6)	2	4
思い切る	4	4.2	2	2	2	2*	2=1	2(6)/4(2)	4.2	4
思い切って	4	2	2	2	2	2*	2	2(6)/4(1)	4.2	4
想い出す	2	2	2	2	2	2*	2	2(7)	2.4	4
思いたったが	2	2.4	2	2	2	N	2	2(6)/4(1)	4	4
思いあたる（こと）	0	5	2	5.2	2	2*	2	2(5)/5(2)/0(1)	5	5
痛めつける	5	2.5		5.2	5	N	2	2(3)/5(4)	5	5
泳ぎ回る	2.5	2.5	2	5	4	2	2	2(5)/5(3).4(1)	5	5
おびきよせる	2	N2.5	2	N5	N5	N*	2	2(4)/5(3)	5	5
叩きつける	5	2.5	2	2	2	2*	2	2(6)/5(2)	5(2)	5.2
ひっぱり出す	5	5.3	3	3	3	4	3	3(5).4(1)/5(2)	5	5(3)
煮えくり返る	3.5*	3*	4	3*	3.5	4	3	3(5).4(1)/5(2)	5	5
のたうち回る	3	N6	N3	N6	3	N5	3	3(4)/6(2).5(1)	6	6
好き好んで	4	1	4		1	4	1=2.4	1(3)/4(4)	4	4
古1.2.3.4/新3.4.5/中0	12/11/1	19/12/3	18/3/2	14/8/4	15/5/4	16/4/0	23/3/1	117/46/15	10/18/3	3/20/4

[表Ⅸ]

	桃16m	香23f	香27m	大久32f	大西20f	大東40f	古16m	計	香54f	古55f
赤とんぼ	3	5	3	3.1	3	3	3	1/6	3	3
影法師	2.3	3	3	3	3	3	3	1/7	3	3
食いしん坊	3	3	3	3	3	3	3	0/7	3	3
ひいじいさん	3	1	3.1	1	1	3.1	1	6/3	1	3
ひいばあさん	3	1	3.1	1	1	1	1	6/2	1	3
古1.2/新3	1/5	2/2	2/5	3/3	2/3	2/4	2/3	14/25	2/3	0/5

[表Ⅹ]

	桃16m	香06m	香23f	香27m	大久32f	大西20f	大東40f	小22m	小24f	小25f	小26m	小27f	古12m	古16m	古21f	古27f	新18m	新20f	新27m	安08m	計	香54f	古55f
八ヶ岳	1.3	3	3	3.1	3.1	1.3	1	1	1.3	1	1	1	1	1	1.3	1	3	1	1	3	1(16).3(10)	3	3
鹿ヶ岳	1	3	1	1.3	1	3	1	1	1.3	3	3	1	1	1	1.3	1	3.1	1	1	1	1(16).3(8)	1	3
身延山	3	3	2	2.3	2	2	2	2	2.1	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	3	2(16).3(5)	3.2	2
古1.2/新3	2/2	0/3	2/1	3/3	3/1	2/2	3/0	3/0	3/2	2/1	2/1	3/0	3/0	2/1	3/2	3/0	2/2	3/0	3/0	1/2	48/23	2/2	1/2